

## 歴史を学ぶ意義を考える「歴史総合」の実践

### —通信制高校におけるスモールステップを意識した単元構想(移民史を題材に)—

県立旭陵高等学校 青木 良輔

#### 1 実践のねらい

本実践では、「歴史を学ぶ意義」を生徒自身が主体的に考えることができる問いを設定し、学習意欲の向上と歴史を学び姿勢の変容を図ることをねらいとした。特に、学習背景や学習意欲が多様な通信制高校の特性を踏まえ、現代社会の課題と歴史学習を結び付ける授業構成を工夫した。移民史を題材として、歴史的視点から外国人との共生という現代的課題を考察することで、生徒が自らの生活や社会と関連付けながら学ぶ機会を設定した。これにより、歴史を過去の出来事として捉えるのではなく、現代社会を理解するための視座として捉え直すことを目指した。

以上を踏まえ、本校のスクールポリシーである「粘り強く努力する」「計画的に学ぶ」「多様性を認め合う」を基盤とし、目指す生徒像として「歴史的視点から現代社会の課題を主体的に考察し、計画的かつ粘り強い学習態度を身に付けるとともに、多様性を尊重しながら、自らの意見を根拠に基づいて表現できる生徒」の育成を図りたい。

#### 2 実践の概要

##### (1) 単元指導計画

科目名	歴史総合	学年・類型		単位数	
単元名	移民の歴史 この単元は、「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」の「(4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」に該当する。				
単元の評価規準					
知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度	
移民の歴史に関する出来事や背景、影響について、理解している。		移民の歴史に関する資料を活用して、歴史的視点から現代的な課題を考察している。		移民の歴史を通して、歴史的出来事を現代の自分たちの課題として捉え、次への学習の見通しをもとうとしている。	
回	添削課題及び面接指導のねらい・学習活動	重点項目 ※1			評価方法
		知	思	主	
添削 1	ねらい「移民の歴史を考察する」	●		●	レポートの記述
	① アメリカにおける移民政策を理解する ② 移民と国際社会との関係について考察する。				
面接 1	ねらい「日本と外国人との共生の在り方について考察する」		●	○	ワークシートの記述
	③ 日本における外国人労働者の課題について考察する。 ④ 単元を振り返り、日本における外国人との共生の在り方について考察する。				
	定期考査	○	○		

※1 指導に生かす評価には「●」、評価に生かす評価には「○」

## (2) 面接指導の評価基準（ルーブリック）

	A	B	C
主体的に学習に取り組む態度	移民の歴史を現代社会の課題と関連付け、自分事として捉えながら、次の学習への見通しをもち、歴史を学ぶ意義を見出している。	移民の歴史を現代社会の課題と関連付け、自分事として捉えながら、次の学習への見通しをもっている。	移民の歴史を現代の課題として捉えたり、次の学習への見通しをもっていない。

## (3) 実践と成果

本実践では、大きな問いとして「私たちは外国から来た人たちとどのように共生していくべきだろうか」を設定し、歴史的事象と現代社会の課題を往還しながら、生徒が主体的に思考を深める学習を構成した。問いは五つの小さな問いによって段階的に具体化し、事実理解、概念整理、課題発見へと生徒の思考が発展するよう工夫した。

面接指導において第一から第五の問いを設定した。第一の問い「戦争中、アメリカの日系人はどのような状況におかれたのだろうか」では、戦時下のアメリカにおける日系人の強制収容や第442連隊に関する資料を用い、日系人が「敵性外国人」として扱われた歴史を考察し、戦争と人権の関係を歴史的背景から捉える活動を行った。第二の問い「日本への外国人入国者数が急増したのはいつ頃か」及び第三の問い「在留者数が増加している国はどこか」では、日本における外国人入国者数・在留者数の推移や出身国の変化を資料から読み取り、近年の外国人労働者の増加について考察した。第四の問い「移民、難民、外国人労働者の意味・定義を調べよう」では、移民・難民・外国人労働者の定義を整理し、議論の前提となる概念理解を共有した。第五の問い「今日の日本における外国人労働者を取り巻く状況には、どのような課題があるだろうか」では、非専門職に従事する外国人労働者が多い現状を踏まえ、低賃金や不安定な雇用、社会的受け入れ体制の不十分さといった課題について考察を深めた。

これらの学習過程はワークシート（別添1）により可視化し、資料の読み取りや考察の深まり、視点の変化を見取った。学習前後の記述を比較すると、生徒は過去の歴史的事例と現代の状況を関連付けながら、「共生」を具体的な課題として捉えるようになっていくことが確認できた。学習後の記述には、差別や偏見への問題意識や、外国人労働者の労働環境改善の必要性に言及するものが多く見られた。また、「互いの文化や背景を理解し尊重することが共生の前提である」「外国人が安心して暮らせる社会をつくる必要がある」といった記述からは、価値判断を伴う思考へと発展している様子がうかがえる。

また、「なぜ歴史を学ぶのか」という問いに対する生徒の認識にも質的な変化が見られた。最初の面接指導においては、「過去を知る」「過ちを繰り返さない」といった知識理解中心の意義が多く挙げられていたが、本実践の面接指導では、歴史と現代社会との関連に着目した記述が増加した。特に、外国人労働者をめぐる課題の考察では、歴史的背景を踏まえて現代の社会問題を捉えようとする姿勢が見られ、歴史学習を「現在の課題解決に資するもの」として捉える認識が形成された。

以上より、本実践は、スモールステップを意識した段階的な問いの設定と資料に基づく評価を通して、生徒の思考を活性化させ、「外国人との共生」という抽象的なテーマを具体的かつ主体的に考察する力を育成する上で有効であったと言える。そして、生徒は歴史的出来事を現代の自分たちの課題として捉え、次への学習の見通しをもつことができたと考えられる（別添2）。

### 3 今後の課題

本実践を通して、生徒の学びの深化や歴史を学ぶ姿勢の変容が確認された一方で、今後に向けたいくつかの課題も明らかになった。第一に、面接指導の出席回数と学習の深まりとの関係である。より多くの面接指導に出席した生徒の記述には、歴史を現在や未来に生かそうとする視点がより明確に表れていた。今後は、可能な限り面接指導の出席率を増やす工夫を行うとともに、出席回数が限られる生徒に対しても、初回から歴史を学ぶ意義を強く意識できる問いや、実生活や将来と結び付けた活動を設定し、少ない面接指導の出席回数でも効果的な意識変容を促す必要がある。

第二に、学習形態の工夫である。本実践では、個別での振り返りが中心となり、他者の意見に触れる機会が十分とは言えなかった。今後は、生徒が多様な考えに触れ、自らの意見を調整しながら思考を深められるよう、協働的な学びの場を意図的に設け、学習の質を高めていきたい。

第三に、学習内容の自分事化・教科横断化である。外国人労働者問題など現代的課題を扱ったことで関心は高まったものの、身近な事例との関連付けは十分ではなかった。今後は、自治体や地域団体の取組、具体的なデータを活用し、学びを実生活に結び付ける工夫が求められる。また、「公共」との教科横断的な関連を意識し、歴史総合で学んだ「移民史と多文化共生」の内容を、基本的人権や社会保障の学習と結び付けることで、知識を統合し、現代社会を主体的に捉える力の育成を図りたい。

以上の課題を踏まえ、「未来をつくるために歴史を生かす」という姿勢が、特定の単位にとどまらず、より広い社会課題へと向かうよう、指導計画の改善を継続していく必要がある。